

医療者側からみた病院図書室と司書の必要性

荒木 亜紀子¹⁾、山本 悦子²⁾

1) 川崎市立井田病院図書室、2) 横浜市総合リハビリテーションセンター図書室

現在日本国内の医療機関では、職員が医療情報を収集するための図書室の設置状況や司書の有無、その司書の待遇も正規職員（専任、兼任）、非正規職員（非常勤、派遣、アルバイト）など、機関により状況は様々です。

医療現場の図書室担当者である私たちは、医療の現場で最新かつ正しい知識に基づいて治療を行うためには、職員がいつでも医療情報を収集できる図書室等の環境と、それらを管理し職員と必要な情報を的確に結びつけることができる司書が必要であると考えています。そして、それは職員の資質や提供できる医療サービスの質や信頼性に大きく影響する重要な要素であると考えています。

しかし、現状では医療情報収集環境の整備は機関ごとの理解度によりまちまちで、担当者の多くの雇用状況は大変厳しく、その環境を安定して維持していくことが難しい状態と言えます。私たちはこうした状況から医療現場における情報収集環境整備の重要性について研究、発信していきたいと考え、研究を始めました。

昨年 MIS29 でのポスター発表では病院図書室と司書の状況を「病院図書室司書」の視点から考察しました。それを経て、非正規職員は「経済的不安定」、正規職員は「病院の他の業務を優先せざるを得ない状況で必ずしも図書室業務に専念できる環境とは言えない」という問題があり、専門スキルが要求されている職種にも関わらず、両者ともに「専門職として腰をすえてスキルアップすることが難しい」という共通の問題があることが浮かび上がってきました。

こうした背景には「医療現場では最新かつ正しい情報をいつでも得られる環境が必須であり、それには図書室や専門の司書を整備することが望ましい」という意識がまだ十分に一般に行きわたっておらず、雇用側の施設ごとに意識の格差があるといえ、そうしたことが病院図書室司書の雇用形態の格差や病院内での位置づけの不安定さの原因となっているのではないかと考えました。

今年は昨年の結果を踏まえ、医療従事者の方々は医療情報収集環境や司書の存在についてどのように考えているのか、その有無でどのような影響があるのかを探っていきたいと考えています。